

「男性」の子育てを考える

松本健輔 坊隆史

「ほんとに子どもに愛情あるの？」

個人カウンセリングでは妻が夫への不満として、夫婦カウンセリングでは夫への怒りとしてこの台詞は耳にタコができるほど聞いている。ただ、この台詞はカウンセリングの一場面ではない。私松本が先日妻から受けた一言である。妻がどの程度本気でいっているのかは定かではないし、この問題が大きな夫婦の問題になったわけではないものの、やはり自分自身もまた当事者の一人なんだと実感した瞬間である。どんなに勉強しようとやはり自分もまた男性という当事者の一人であるということからは逃れられないのだ。

今回は自分自身が父親という当事者になり感じたことを切り口に、子育てにおける男性支援の問題提起をしたい。

1、子育てをめぐる女性からのクレーム

妻から離婚を切り出す際、妻がその理由を子育てに非協力的だった昔の夫の態度が根本にあると語る場面をしばしばカウンセリング場面で目にしてきた。つまり、どうしてあんなに大変な時期に私のケアをしてくれなかったのだということだ。子どもが小さい時は、授乳のため夜眠れない苦しさ、大きくなると他の子どもと比較してしまう葛藤、また子どもの友達の母親や教育者（保育士や教師）などとの関係の悩みなどを夫に相談しても受け止めてもらえず、それがやがて夫婦の亀裂になるのだ。

そしてもう1つ多いのが、夫が子どもを愛していないのではないかという疑問である。これもまた蓄積していくことで妻の離婚という選択を強く後押ししているように感じる。この手の不満を持つ女性の多くは夫が子どもと関わる関わり方、関わる時間などにひっかかりを感じて、愛情が薄いのではという結論を導きだす。離婚を決断し

た女性は以下のように語っていた。

「子どもが産まれて生活が一変したんです。毎日泣く我が子と誰もいない家の中で数年間向き合って。もちろん可愛いと思うこともあるんです。でも誰も助けてくれないという不安が常にあって。逃げ出したいけど逃げ出せない。夫に不安を話しても聞いてはくれるが、土日には趣味のゴルフに行ってしまう。私は24時間育児だということに。。。たまに子どもを見てあげるといってくれるんですが、すぐに泣いて私が呼ばれる。着替えをお願いしても上手くしてもらえず余計手間が増える。今でもあの時のことが大きく残っているんです。」

またある人は、子どもの発達、教育についての会話で夫とのズレを感じたと語った。

「夫は子どもに愛情があると言うのですが、小さい頃だったら子どもの発達の話、最近では子どもの教育の話に無関心なんです。二言目にはお前に任せると。子どものことを真剣に考えているとは思えないんです。」

2、男の視点

「子どもが出来た時、男として家族を守らないと強く思いました。だから、それまで以上に仕事に没頭して今日まで頑張ってきました。それなのに今子育てに協力してくれなかったと離婚といわれて納得ができるはずがありません。」

ジェンダー意識を内在した男性は、自分の家族の中の役割を仕事をしてお金を稼ぐことどれだけ意識的であるかは差異があるがものの、それが自分の役割だと考える傾向がある。警視庁生活安全局(2011)の自殺の概要資料によると、経済・生活問題で自殺した男性が2325人なのに対して、女性は265人と、その思いが正しいのかどうかは別として、いかに男性が働く性の役割意識を持っているかが伺える。

他方で、イクメンという言葉が生まれ、育児に協力的な男性を良しとする社会に変化しているようにも感じる。ただ、現実には育児休業という視点でこの問題を考えてもまだ男性の育児を後押しする社会とまでは至っていないのが明確である。男性の育児休業取得率は平成23年で2.6%しかないのが実情だ(厚生労働省2012)。この数字が物語っているのは、社会の圧力か、個人のジェンダー意識かはわからないが、男性が働くことより一時的でも子育てを優先するという選択肢があるにも関わらず、その選択肢を取ってないまたは取れない事実があるということだ。ある男性は以下のように話していた。

「朝6時に家を出て、夜12時に家に辿りつく。その生活の中で子育てに関与しろと

「というのは正直無理があると思う。でも申しわけないという思いがあるから土日は頑張って子どもを見ているが、それでもあなたは仕事で良いわねと言われる。」

また、こんな語りも本当によく耳にする。

「どうしても仕事で遅くなるので子どもと接したくても接する時間が持てないんです。その中で子どものことをとやかくいうのは毎日見ている妻に申しわけないと思いがちありますし、なにより子どもを見ていない人間が正しい決断を下せるとは思わないんです。それに、こちらが意見を言うと子どものことを見てないのに何言っているのと怒られる。だから子どもに関する決断には関与できなくなりました。なのに子どもにも無関心だと責められる。どうしたらいいんだと。。。」

妊娠、出産から始まる子育て初期では、否応なく母と子どもの時間が多い。その中で子どものことをより理解するという点で、母親にはアドバンテージが存在する。その上女性は、母親同士で情報の共有をしたりして、男性と女性では知識にも差が出てしまう。その中で子どものことにどう関わっていいのかわからない男性は多い。もちろん勉強すればいいという指摘も正しいのだが、仕事を抱え、さらにそれ以上という余裕が持てない男性も多いのが現状だ。

ここで個人的な話に戻るが、今毎朝生後七ヶ月の息子を保育園に送っていき、週に数回は迎えに行き、妻が帰るまで二人で過ごす。これは本当に幸運なことだと思っている。というのも何も話せない、突然泣き出す子どもと二人っきりで過ごす時間は想像以上に大変だ。ミルクをやって、おむつを替えても泣き止まないとき逃げ出したい気持ちになるのも事実ある。その実感があるだけにまだ妻の大変さも多少共感ができる（もちろん共感のレベルは多少という括弧が常につくののだが）。そんな私だが、やはり仕事が大変な時は家に着いて少しほっとしたくなる時もある。それは子どもの顔を見るより先にソファでくつろぐという行動になる。そんな些細なことですら、妻からすると何より先に子どもの顔を見に行きたくないんだと不思議な思いになるようだ。

3、男の子育てとは？

ここで、男の子育てを考えていきたい。いざ子育てに関わろうとした男性にとって、男性の子育てとは何かという問題が浮上する。母親の子育てをトレースすることが男の子育てなのだろうか。中村（2007）は、父親の育児のかかわりは、ママのようなパパになるという「ママパパ化」では意味がないと論じている。さらにその上で、適切な男性性役割モデルを果たすことの必要性を述べている。たとえば、車好きな男の子

とモーターショーと一緒にいき、そこで男性的な文化を共有するなどが挙げられるのではないだろうか。つまり、母親とは違う、父親が男らしく子育てをすべきなのだという事だ。ただ、上記で挙げた具体例も含めて、本当にそれが男性性役割モデルといえるのか。男性性役割モデルとは何なのか。そして、それがなぜ必要なのか。その難解な解を求めこの議論は今後、男性による子育てを促進し、援助する上で必須事項ではないだろうか。

ただ、私はもう一つ大切な視点を忘れてはならないと思う。男らしく子育てができた過程として、その子育てが本当の意味で機能するには男性の子育てを協力として認めるパートナーの存在が必要不可欠なのである。つまり、男らしい子育てを妻と共有していく必要があるのだ。ただ、男女では視点そのものが違う場合が多い。一見どうしても見落とされがちな話であるが、実はこのことがとても大きな課題である。良い子育てが出来たと男性が思っても、女性がそれを嫌だと言い離婚を切り出されては元も子もない。そういう意味で、男性の子育て支援という視点で考えた場合、男性性役割モデルを作り上げていくということと同時に、妻との共同関係をどう作っていくのかということ支援することが大切であると思われる。

今回は子育てにおける男性支援の問題提起を行なった。私自身、まだこの問題に関して関心を持ち始めたばかりの初学者であり、親としても始まったばかりの人間だ。そのため今の段階で問題提起のみで解を考えるとところまでは進んでいない。ただ、今後この二つの問題を、援助者として、そして当事者として真摯に向き合い深めていければと考えている。

警察庁生活安全局生活安全企画課(2011) 平成 22 年中における自殺の概要資料 警察庁
Homepage (<http://www.npa.go.jp/toukei/index.htm#safetylife>) (2013 年 5 月現在)

厚生労働省(2012) 平成 23 年度雇用均等基本調査 厚生労働省
Homepage(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-23r.html>) (2013 年 5 月現在)

中村正(2007) 社団法人 元気なお父さんづくり応援ブック 2007 仕事人間だけではない「多面的な自分の発見！」を 日本家庭生活研究協会
Homepage(<http://www.jfca.or.jp/case/project/index3.html>) (2013 年 5 月現在)